



【農業列島】
産地ルポ

トマト

香川県 JA香川県

トマト黄化葉巻病耐病性品種
「TY千果」の導入で
栽培性と食味を両立

JA香川県 営農部 園芸課 池田 智美



↑右から仲多度地区ミニトマト部会役員の平包寛さんと、JA香川県 営農部園芸課の和泉正浩課長補佐と筆者。

地域概況

～おだやかな気候を利用した高品質・個性化栽培に取り組む～

JA香川県は1県1JAとして、「日本の地中海」ともいわれるおだやかな瀬戸内気候により、冬季でも暖かく、降雪日も極めて少ない温暖な地域で、青果物の生育にとって最良の環境となっています。特産は米、野菜、花き、果樹、畜産と多岐にわたり中でも野菜は、ブロッコリー、レタス、にんにく、トマトを中心に栽培されています。トマトにおいては、温暖な気候を利用した施設栽培が盛んで、主に多度津町、さぬき市、普通寺市、東かがわ市で栽培を行っています。

また、1戸当たりの耕作面積が小さく、大量生産がかなわないことから、高品質・商材の個性化など、高付加価値の作物を作ることで国内外の競合産地との差別化を図っています。生産者一人ひとりの丁寧な栽培によりおいしい青果物を生み出しています。

JA香川県ミニトマト部会
当管内のミニトマトは、昭和60年ごろから栽培をはじめ、「ミニキャロル」の発表とともに急速に県下全体に普及しました。生産者は高齢化や後継者不足などで減少傾向にありますが、新規就農者も入っており、平成30年度で生

産者数124戸、栽培面積15ha、出荷数量は1180tを計画しています。栽培は通常土耕から養液栽培に移行しており、現在は6割以上が養液栽培となっています。

作型は促成長期(8月～6月)、抑制(8～11月)、半促成(11月～7月)、雨よけ(3～10月)と使い分けることで、長期出荷を可能としています。出荷先は関西(大阪、京都、兵庫)、四国を中心に行われています。

産地を悩ませる
トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻病は、タバココナジラムによって媒介されるウイルス病で、平成17年に香川県への侵入が確認され、県内各産地に被害が拡大しました。本県では、タバココナジラムの侵入防止対策や侵入後の迅速な防除対策を実施することで対処を行っています。しかし、防虫ネットのすき間からのコナジ

ラムの侵入などにより数カ所は黄化葉巻病の発病がみられ、被害の大きい圃場では50%近い被害株が発生する状況で防除に苦慮していました。病害に悩む生産者からはTY(トマト黄化葉巻病耐病性)品種の登場が待ち望まれていました。

TYと食味のよさを
併せもつTY千果

当管内では、以前からタキイ品種の評価が高く、果色が鮮明赤色系で裂果に強く、糖度も安定した高品質種として「CF千果」「千果」を主に栽培してきました。新品种の「TY千果」は、トマト黄化葉巻病耐病性品種として平成27年度より試験的に栽培を始め、30年度からは普通寺市、高松市を中心として導入が始まりました。

当地の「TY千果」導入の取り組みについて、仲多度地区ミニトマト部会部会役員平包寛さんの栽培を例にご紹介します。

平包寛さんの栽培

品質のよさに着目して「TY千果」を導入

平包さんは普通寺市にてハウス1棟、栽培総面積約14aの養液土耕にてミニトマトの生産に取り組まれている生産者です。



↑高度環境制御を導入。「TY千果」は生育旺盛なので肥料濃度は高めに設定しています。



↑平包さんのミニトマトのハウス。トマト黄化葉巻病対策として、ハウスの開口部は0.4mmネットを展張。出入り口には二重にネットを張っています。



↑平包さんの「TY千果」圃場。今年から灌水をオンラインドリッパーに変更しました。記録はしっかりと残し今後に生かしています。



↑食品率高く、食味のよい「TY千果」。

特に平成30年は例年に比べて長雨や朝晩の寒暖差で結露が発生しやすく、ハウス内の湿度の上昇から裂果が多く

裂果の少なさが食味のよさにつながる

今作は定植時期の8月の高温、9月の日照不足により低段の花房が小さく、果実も小さめになりましたが、10月の降の好天候により草勢は回復しました。「CF千果」に比べて節間が伸びやすく、茎が折れやすいので誘引作業は気を使いますが、裂果やへた取れが少なく秀品率が上がります」とのことです。

裂果へた取れが少なく秀品率が高い「TY千果」

「TY千果」発売当初から試験栽培を行っていた平包さんは、今作（平成30年度）はすべて「TY千果」を導入されました。「黄化葉巻病の被害は最小限に抑えられています」とTY耐病性は合格。果実は裂果が非常に少なく、玉ぞろいがかきれいで食味もよいとTY品種のなかでも品質の高さに着目されています。これまで50品種以上の試験栽培を行ってきた経験から、「TY千果」を高く評価されています。

ありましたが、「TY千果」は非常に少なかつたそうです。

ミニトマトは完熟で収穫しないと、特有のえぐみ（ミニトマト臭さ）が残り、食味が悪くなるといわれます。「裂果のリスクがあるときは早めの収穫になります。TY千果なら完熟近くで収穫できます。裂果が少ないことは商品化率を高めるだけでなく、食味の向上にもつながっています」

えぐみがなくなり甘みが増すことが食味のよさにつながっているというのが平包さんの見立てです。

また、近年はミニトマトを2分の1カットしてサラダの彩りにすることもあり、果肉まで赤い「TY千果」は消費者の反応も期待できます。

草勢の管理が良品多収のポイント

栽培については、着色スピードが他品種に比べて遅く、株への負担が多くなるため追肥や摘葉によって採光性を確保することで生育を良好に保つ必要があります。「TY千果」は特に草勢が強いため追肥量が多いと葉が大きくなりやすく、さらに日照の少ない時期は薄くて大きな葉になりがちです。光合成の兼ね合いで摘葉の量やタイミングを計るのが難しいようで、平包さんは株全体の状態を観察しながら的確なタイミングを模索されています。

12月から厳寒期に向けては低日照の影響で糖度が上がりにくい時期になりますが、的確な草勢管理で3月以降の収量を確保したいと話します。

「草勢管理は大変だが、裂果が少なく食味よい「TY千果」をうまく栽培したい」と、平包さんの期待も大です。

玉ぞろいよい「TY千果」で出荷作業もスムーズに

JA香川県の出荷規格は手作業による200gパック詰めが中心で、一部で3kg段ボールバラ詰めも行っています。「TY千果」は他品種に比べて、玉ぞろいがよく収穫から出荷作業の短縮化が図れていると思います。

「TY千果」で香川のおいしいミニトマトを安定出荷

JAでは県普及センターと協力して定期的に講習会や巡回を行うなど産地指導にあたり、高品質栽培の平準化を実現するべく積極的な取り組みを行っています。特に「TY千果」については今年から栽培をはじめた生産者も多く、タキイ種苗の技術員と情報の共有化を図りながら巡回を実施しています。

また、JA香川県ミニトマト部会では市場担当者招いて年1回の品等査定会を実施し、県下の出荷規格や品質の平準化を図っています。今後も、香川県産の高品質ミニトマトのブランド化に向けて活動していきます。